

ふかひれ水

金井中学校 一年

ふるや
古屋 亮丞

世界中でフカヒレブームがまき起こっていた。世界中の海で材料となるアオザメ、ヨシキリザメ、メジロザメが乱かくされていた。

サメを愛してやまない鮫島一郎は、何とかサメを救いたいと思った。そこで「フカヒレ水」という、植物せんいで作られた飲み物で、見かけは水のようなだが、味はフカヒレスープのよう、塩をまぜるとフカヒレそのものようになる、夢のような食品の製作を思い立った。しかし、一郎は何度も試行さくごを続けたが、とうとう作ることはできなかった。

一郎の夢は息子の次郎に受けつがれた。次郎はついにフカヒレ水の開発に成功したが、まずくてだれも飲んでくれなかった。

夢は孫の三郎に受けつがれた。三郎はとうとうおいしいフカヒレ水を開発した。しかし、商売が下手だったので、フカヒレ水はぜんぜん売れなかった。

夢はひ孫の四郎に受けつがれた。四郎は、商売の才能があり「フカヒレ水」は飛ぶように売れ、第二次フカヒレブームがまき起こった。一郎がフカヒレ水の製作を思い立ってから、百年がたっていた。

しかし、すでにアオザメやヨシキリザメなどは五十年前に絶滅し、本物のフカヒレは食べられなくなっていたのだった。

審査員講評 *****

フカヒレというテーマ選びとアイデアがまず個性的です。研究がどんどん次の世代に受け継がれるという展開は壮大なのにテンポがよく、続きが気になってどんどん読みたくなります。原稿用紙一枚半という短い作品ですが、大きいスケールでメッセージ性も味わいもあり、無駄のない美しさを感じました。

—— 藤岡 みなみ